

機関番号：35411

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520343

研究課題名（和文）乾隆朝初期における杭州詩人集団の研究

研究課題名（英文）The Study of Hangzhou poet group at the first stage of Qianlong era

研究代表者

市瀬 信子 (ICHINOSE NOBUKO)

福山平成大学・経営学部・准教授

研究者番号：50176294

研究成果の概要（和文）：乾隆朝初期に、杭州詩人たちが各地に移動して行った詩会活動に焦点をあて、その活動の実態と詩作について考察を行った。その結果、『韓江雅集』という、揚州の韓江詩社の唱和集が、杭州詩人の作を多く含み、杭州詩壇の活動を反映する作品集であることを明らかにした。また寧波人で学者でもある全祖望が、杭州詩壇の影響を受け、杭州詩壇の一員として、各地の蔵書家をパトロンとし、豊富な知識を生かした史実を補う詩作、詩集の編纂に取り組んだことを論じた。

研究成果の概要（英文）：At the first stage of Qianlong era, the Hangzhou poets traveled various places and there brought the poem-assembly into play. We considered their actual condition and poem. As a result we could make clear, that the joint anthology *Hangjiang Yaji*, from Hangjiang poem publishing in Yangzhou, includes many poem of Hangzhou poet and reflects the activity of Hangzhou poetical circles. Further we argued about Quan Zuwang's work, namely, he, the man of Ningbo and scholar, edited poems and anthology under the influence of Hangzhou poetical circles and by having assistance of book collectors from various parts, and supplied the historical fact by putting rich knowledge to practical use.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	240,000	1040,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：中国文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：乾隆、杭州、詩社、唱和、韓江、全祖望

1. 研究開始当初の背景

(1) 国内では、明清における文人集団の研究は、明代が主たる研究対象であり、まとまった成果としては横田輝俊「明代詩文社の研究」(『中国近世文学評論史』溪水社、1990)がある。他は、明末清初という時期に文学結

社から政治結社へと変質していったことに注目した、社会史的観点からの研究が主であった。

詩社ではなく、一時の詩会についての論はいくつか見られるが、国内では詩会、詩社の研究対象は明代から明末清初に限られてお

り、清代の乾隆期を対象とした文人集団の研究はほとんど行われていない。

(2) 国外においては、郭紹虞の「明代的文人集団」「明代文人結社年表」(『照隅室古典文学論集』上海古籍出版社、1983 所収)があるが、これは明代の詩社を取りあげたものである。その他、明末清初の文人集団についての論考は多数有るが、清代の文人集団の研究は清末に関するものはあっても、乾隆時代の文人集団の研究は少ない。その中で、厲鶚と杭州詩社に関しては孫克寛に「杭州詩社与厲樊榭」(『大陸雜誌』1980) 他、数編の論考があるが、詩人の交遊関係を論じ、詩会についての考察はほとんどない。

清代の文献には乾隆初期に杭州詩会が盛んであったという記述がしばしばみられる(袁枚『隨園詩話』他)が、それに関する研究はほとんど手つかずの状態であった。

2. 研究の目的

(1) 清朝乾隆時代初期の十数年間とう短い期間に、杭州・揚州等を中心に盛んに行われた詩会活動に焦点を当て、詩会の中心にいた杭州詩人の活動を明らかにしようとするものである。

(2) 清代の浙派と称される詩派の詩人達の特徴の一つに挙げられる典故の多用が、各地の蔵書家のもとを移動しつつ詩会活動を行ったことと関連することを明らかにし、清代詩壇の動きを、詩会という側面から捉え直そうというのが本研究の目的である。

3. 研究の方法

(1) 厲鶚を始めとする杭州詩人の著作、地方誌、同時代の関係文献を調査し、各地を移動した杭州詩人たちの活動の様子を明らかにする。詩会の中心であった杭州の厲鶚『樊榭山房集』、杭世駿『道古堂集』を中心に、杭州詩人の詩文集をもとに、詩会の開催地、参加者などを調査する。

これらの調査は、出版されている書籍の他、国内外の図書館所蔵の版本をもとに行う。関連のデータベースを用いて、必要事項の調査を効率的に行う。

(2) 杭州以外の土地で開催された詩会に杭州詩人が参加した例として、揚州の詩会資料を調査する。とくに名古屋大学所蔵『韓江雅集』に焦点をあてて調査を進める。まず詩題と参加者を拾い上げ、参加者の登場時期と参加回数、詩の内容を調べ、一覧表にまとめる。これによって、編年で参加者の傾向や詩会の詩の傾向が明らかにする。なお『韓江雅集』については北京の国家図書館において、所蔵版本を調査し、名古屋大学所蔵本と同一版本であることを確認した。

(3) 『韓江雅集』の詩人全員の伝記を、各種の史書、地方誌、筆記資料によって調べ、

参加者がいかなる人物であったか、どのような経緯で詩会に参加したかの調査を進める。

『杭州府志』を始めとし『揚州府志』、『清史稿』、『清史列伝』、『湖海詩伝』他を調べ、関係事項をまとめる。データベースがあるものについてはそれを活用し、効率化を図る。

(4) 杭州詩人以外に、杭州に係する詩人が『韓江雅集』に含まれている可能性があるため、先の調査によるデータをもとに、各詩人の詩文集や年譜を調べ、杭州詩壇との関わりを示すものがないかを調査する。その結果、『韓江雅集』に関する他の研究では指摘されていなかった、杭州との関連を多く発見することとなった。

(5) 揚州、杭州での詩会の参加者のうち、代表的な同人で最も長く揚州に滞在した厲鶚と、揚州に長く滞在して揚州詩壇にかかわった寧波の全祖望に焦点をあて、その活動状況を調査する。特に故郷寧波に関わる文学活動が評価されている全祖望が、実は杭州との関わりが深いことに注目し、杭州詩壇が外部と積極的に関わった例として、全祖望の詩会活動に関する調査研究を行う。

(6) 全祖望の『鮎埼亭集』、厲鶚の『樊榭山房集』、杭世駿『道古堂集』には詩会や詩社の記録が多いため、これらを中心に、揚州と杭州での活動、また全祖望については寧波での活動を調査し、各地での活動がどのように関連を持ったかを調査する。

(7) 全祖望の唱和詩に関する活動が、杭州詩人との交流の中で行われたことを明らかにするために、年譜資料、詩文集の他、『韓江雅集』あるいは清代の筆記資料などを調査する。また全祖望編纂の『続甬上耆旧詩』『句余土音』と、杭州厲鶚の『宋詩紀事』『南宋雜事詩』等の制作態度の共通点について考察する。

4. 研究成果

(1) 『韓江雅集』と杭州詩壇

① 杭州詩人集団が、杭州以外の地で活躍した一例として、揚州の詩会をとりあげ、そこでの杭州詩人集団の活動の実態について調べた。乾隆初期、揚州では塩商が富裕な財力をもって文学、出版、芸術、学術に関わる文化事業を支えていた。とくに蔵書家として知られる馬氏の小玲瓏山館には、厲鶚、陳章など、杭州詩人が多く集った。そこで編纂された代表的な唱和集が『韓江雅集』である。これは乾隆八年～十二年の、6年間にわたる韓江詩社の唱和の記録であり、収録詩人数41名、収録された詩題は、聯句を含めて90という、大部のものである。乾隆初期の揚州詩壇の活動を示す資料として取りあげられることの多い『韓江雅集』であるが、その中には、詩会の主催者であった富裕な商人たちの他に、無位無官の詩人の名が多く見られる。沈徳潜

の序は、もともとこの詩集につけられたものではないが、『韓江雅集』の最初の唱和詩と同年に開かれた韓江吟社の詩会における唱和詩集につけられた序であり、当時の韓江吟社の様子を記したものである。それによれば、同人は揚州の人、遠方から寄寓している人から構成されており、すべて在野の人である。園林を行き来して互いに詩会を主催し、定期的に詩会を開催していたという。この中の、「寄寓する者」の多くは杭州詩人及び杭州詩壇と関わりの深い詩人達であることを以下に明らかにする。

②『韓江雅集』は編年の詩集である。参加した詩人を、登場順に並べると以下の通りである。なお（ ）内は登場回数を表す。

胡期恒（46）、唐建中（28）、程夢星（67）、馬曰瑄（82）、馬曰璐（90）、汪玉樞（28）、厲鶚（55）、方士庶（28）、方士廔（60）、王藻（37）、陳章（92）、閔華（81）、陸鍾輝（65）、全祖望（20）、張四科（65）、史肇鵬（1）、楊述曾（1）、高翔（2）、洪振珂（17）、黃裕（1）、鄭江（1）、張世進（21）、趙昱（1）、丁敬（1）、杭世駿（10）、趙信（1）、趙一清（1）、戴文燈（1）、陳祖范（1）、查祥（1）、姚世鈺（20）、張燾（1）、劉師恕（4）、王文充（3）、程士械（3）、団昇（1）、方世挙（1）、鮑鈺（1）、釈明中（1）、邵泰（1）、陸錫疇（3）、樓錡（7）。この中で、揚州詩会を主催した塩商関係者は程夢星、馬曰瑄、馬曰璐、汪玉樞、方士庶、方士廔、陸鍾輝、張四科、張世進で、参加回数も多い。その他揚州に居住していた胡期恒、唐建中、王藻らは当然頻りに詩会に参加するが、その他に回数で多いのは、厲鶚と陳章である。この二人は杭州人であるが、厲鶚は揚州詩社の主導者（『職志』）とされ（『鮚埼亭集』巻第二十「厲樊榭先生墓碣銘」）、陳章は弟陳阜とともに揚州の塩商が詩会開催にあたって奪い合ったと言われる（杭世駿『道古堂集』巻十一「吾尽吾意齋詩序」）ほどの詩人である。揚州詩壇の領袖たる詩人は、実は馬氏のもとに寄寓した、これら杭州詩人であった。また杭州の杭世駿も、たびたび揚州に立ち寄り、韓江雅集の主要人物と認識されている（『広陵詩事』巻七、『揚州画舫録』巻四）。

③その他、『韓江雅集』に参加した杭州詩人として鄭江、趙昱、丁敬、趙信、趙一清、查祥、張燾、釈明中を挙げることができる。更に、杭州人ではなくとも、杭州及び杭州付近に滞在し、杭州詩会に参加していた者に全祖望、姚世鈺、鮑鈺、程士械がいる。つまり韓江雅集参加者41名中、15名は杭州詩壇の関係者であった。詩会のパトロンであった揚州の塩商を除くと、揚州詩壇の詩人の多くは杭州関係者であったといっても過言ではない。又厲鶚、趙昱、趙信は先に「南宋雜事詩」を發表して名声を得、乾隆元年には博学鴻試に推挙されている。その他、陳章、杭世駿、

丁敬、查祥も乾隆元年博学鴻試に推挙されており、杭州の名士が揚州詩壇に揃った情況が『韓江雅集』から見て取れる。

④韓江吟社の成員で馬氏の元に寄寓した詩人として全祖望、符曾、陳撰、厲鶚、金農、陳章、姚世鈺が知られるが（『清史列伝』巻七十一馬曰瑄）、全祖望と姚世鈺以外は杭州人であり、姚世鈺も全祖望も同じ時期に杭州に滞在して杭州詩壇の一員として活動していた（『全謝山年譜』）。符曾、陳撰、金農は『韓江雅集』には含まれていないが、韓江吟社に杭州人が多かったことが、これらの記述から明らかである。

⑤『韓江雅集』の中で、乾隆八年の作を収める巻七には、杭州詩人の一団が揚州に集合した様子が記録されている。「漢首山銅雁足鐙歌為嶠谷半查賦」詩には、17人の詩人が参加するが、揚州の塩商を除くと、ほぼ全員が杭州詩壇の成員である。この乾隆八年は杭州の杭世駿が北京を離れて杭州に帰り、厲鶚と南屏詩社を立ち上げた年でもある。その成員が一堂に会したのが、この時であり、杭州詩社が揚州詩社との交流を図った時ではないかと考えられる。全祖望の記述に、揚州馬氏を中心とする詩社は厲鶚を主導者とし、ついで杭州で詩社が作られたとある（『鮚埼亭集』内編巻二十「厲樊榭墓碣銘」）。これは韓江詩社と南屏詩社のことを指していると思われ、その交流のさまが『韓江雅集』に現れているのである。また『韓江雅集』には、揚州の主催者が入らず、杭州詩壇のメンバーだけが参加した「小玲瓏山館对雪聯句」、馬氏と杭州詩壇のメンバーだけが参加した「看山楼雪月聯句」があり、これも揚州の韓江詩社が杭州詩壇の活躍の場であったことを伝えている。

⑥『韓江雅集』と同時期に杭州で開かれた大規模な詩会が、乾隆十一年春の西湖での修禊である。参加者は61名。『韓江雅集』にみえた杭州人の名が多くみえるが、揚州と異なる点は、揚州詩壇からの参加者はいないことである。『韓江雅集』における杭州人のように、多数の詩人が余所の地で詩会に参加するということはなかった。南屏詩社の成員も、やはり杭州人たちであり、揚州や他の地の詩人は含まれない。つまり、杭州詩人たちだけが、余所の地に移動して活発に活動していたのである。

天津查氏の詩会でも、厲鶚、趙昱などの杭州詩人が中心となって活躍しており、一つ地域の複数の詩人達が同時に各地に移動して詩会に参加するというのは、乾隆初期の杭州詩人の特異な活動であったといえる。

⑦杭州詩人を中心とした詩人たちを「浙派」と称することがある。浙派の特徴に、僻典など、典故を多用することがあげられる。また「南宋雜事詩」にみられるように、史料には

取りあげられない古跡等を詩に詠い、歴史を補う史料としての詩を目指すという特徴もある。浙派について、陳衍は「杭州南屏詩社の一脈」（『石遺室詩話』巻二十三）と述べており、杭州詩社の活動がそのまま浙派につながっていることを指摘している。これは杭州詩会が趙昱、趙信、呉焯らの蔵書家のもとで開かれ、詩社同人は蔵書を利用して書物の校訂、歴史上欠落した史料発掘等の作業に携わっていたことと関係していると考えられる。

⑧揚州の馬氏ら蔵書家のもとで開かれた詩会にも、同じ傾向が見られる。古蹟をうたうことがしばしばあり、『韓江雅集』巻二「浮山禹廟觀壁間山海經塑像排律三十韻」に付された全祖望序には、「志乗の闕を補う」、「材を取るには則ち其の雷同を避く」とあり、歴史を補う資料的役割としての詩作、独創的な典故など、浙派と重なる特徴がみられる。揚州の詩会ではあるが、蔵書家の主催する詩会であり、また杭州詩人が主体となっていたために、揚州の唱和詩もまた浙派の特徴を持ったのである。

(2) 全祖望と唱和詩—杭州詩壇との関わりを中心に—

①全祖望は学者としての評価が高いが、詩人としては知られていない。しかし、当時は詩の唱酬で名が知られていた（李慈銘『越縵堂日記』光緒己卯三月十五日）。唱和集として『句余唱和集』（句余土音）、『七峰堂唱和集』、『韓江唱和集』などがあり、揚州、杭州、寧波の各地で同人達と唱和を行っていた。よって各地での唱和の状況を具体的に明らかにし、特に関わりが深かったと考えられる杭州との関連について考察した。

②揚州では、馬氏宅に寄寓し、揚州詩壇での詩会に参加し、盛んに唱和詩を作るとともに、詩会同人の伝記を多く書き残す。揚州を全祖望が初めて訪れた時、揚州の韓江吟社の代表者である馬氏に彼を引き合わせたのは、全祖望が杭州で親しくしていた厲鶚だと考えられる。やがて韓江吟社において、全祖望は領袖の一人と目せられ、欠かせない人材と評価されるようになる（『湖海詩伝』巻六陳章）

（『樊榭山房集』巻六「九日行庵文謙図記」）。また、韓江詩社を代表する10人に前五君、後五君の称号がつけられたが、全祖望は後五君に含まれている。このように、全祖望は学者としても有名であったが、同時に揚州詩会を代表する詩人でもあった。

③寧波では、乾隆七年に同郷の同人と真率社という詩社を結び唱和を行ったことで知られる。その成果を『句余土音』という詩集にまとめようとした。8ヶ月にわたる期間のうちに作った詩であるが、参加者は原稿を提出せず、全祖望の詩のみを収録する形で弟子が出版した。全祖望の序は、寧波の詩社の歴史

を事細かに記し、更に自らの真率社がそれを引き継ぐものであること、さらに『句余土音』で歴史に埋もれている寧波の歴史を描く意志を表明している。これらは全祖望の寧波への思いと同時に詩社への思い入れが強かったことを表すものである。結果的に『句余土音』は、寧波の歴史、人物、古蹟、貢産、学者、墓里、土物などあらゆるものを記した地方誌と称されることになる（袁行雲『清人詩集叙録』文化芸術出版社 1994）。また、李杲堂の『甬上耆旧詩』が明代万暦年間までの詩社を記録するのを引き継ぎ、『続甬上耆旧詩』を編纂する。明末寧波人の節義を描くという点がこれまで評価されてきたが、同時に寧波の詩社の活動を記録した資料とみることができる。このように、寧波では、詩社の歴史を書き残すこと、詩社の詩によって埋もれた歴史を唱和詩の形で残すこと、更に自ら詩社を設立し唱和を行うことを同時に行い、寧波の唱和をもり立てていったのである。

④杭州については、全祖望16歳の時に杭州に赴き、19歳からは数年滞在し、厲鶚、杭世駿らと唱和と学术交流を続け、様々な影響を杭州人から受けている。杭州の詩会は、揚州と同じく蔵書家のもとで行われた。蔵書家の趙昱、趙信兄弟は杭州詩会の代表的な主催者であり、『韓江雅集』にも名を残し、更に天津の富商で蔵書家の査為仁の詩会にも参加した人物である。各種の注釈や校訂で知られる学者でもあり、全祖望との共通点が多い。蔵書家のもとでは、蔵書を利用して校訂作業等と同時に詩会が開かれ、唱和詩が作られるのが常であった。学者である全祖望は揚州、杭州の蔵書家のもとを訪れ、資金的な援助受けつつ書籍を利用して様々な学術活動を行っていた。揚州詩壇の代表格であった彼は、杭州で杭世駿らが開いた南屏詩社を中心とした詩会の成員としても活躍し、唱和を盛んに行ったという記録がある（『清史列伝』巻七十一趙昱）また無官の詩人が多かった杭州詩会の詩人の伝記を数多く書き残しており、その中に詩社や詩会に関する記事を入れている。これも全祖望が杭州詩会に深く関わっていたことの証左となる。

⑤一般に寧波（浙東）の詩社と杭州（浙西）の詩社は、その性質が異なるとされる。杭州詩社は遊びが多く退廃的であり、寧波は悲憤慷慨を詠じる、という評されることが多い。全祖望についても、寧波の詩社に関する著述が多いため、杭州とは相反する傾向にあると論じられることが多かった。

しかし、全祖望は揚州では韓江吟社で杭州詩人と共に活躍している。また韓江吟社の詩人として全祖望、符曾、陳撰、厲鶚、金農、陳章、姚世鈺が挙げられるが（『清史列伝』巻七十一馬日琯）、全祖望と姚世鈺は杭州人でないものの、どちらも杭州詩壇の一員とし

て活動していた時期がある（『全謝山年譜』）。更に全祖望は後にも再三杭州を訪れ杭州の詩会にも参加している。全祖望が最も尊敬する詩人は杭州の厲鶚であり（全祖望『鮚埼亭集』内編卷二十「厲樊榭墓碣銘」）、金銭的な事情でかなわなかったが、杭州への移住も希望していた。乾隆十一年の杭州での大規模な詩会に全祖望は寧波から一人参加している。このように、詩会に関しては、全祖望は杭州を寧波に対立するものとは考えておらず、むしろ杭州の強い影響を受けて、詩会に関わったといえる。また祖先が杭州の人であったことも大きく影響していたと考えられる。厲鶚が『宋詩紀事』を編纂した際に、全祖望は作業に協力し、その中で自分の祖先が宋末の杭州の代表的な詩社である月泉吟社の一員であったことを述べる（『鮚埼亭集』内編卷三十三「冬青義士祠祭議三与紹守杜君」他）。また、祖先が月泉吟社で名乗った「孤山社遯初子」「泉翁」の名を借りて、「孤山社小泉翁全祖望」と名乗ることもあった（『韓江雅集』卷二「浮山禹廟觀壁間山海經塑像排律三十韻序」）。趙昱、趙信兄弟に送った書翰の中で、杭州の唱和の活動を北京でも行うことが「吾が党」の幸いであると記している。つまり、杭州詩会の一員と自ら認め、そのことを誇りに思っていたのである。よって、従来言われてきたような全祖望は寧波の詩人を伝えるために活動した、という見方は一面的であり、杭州詩社と深い関わりを持ち、杭州詩壇の一員としての面があったことを見逃してはならない。

⑥全祖望は唱和に関する事項を記録することにも熱心であった。唱和は引退した官僚や元々無位無官の詩人たちが行うため、世間的な地位から言えば無名の詩人たちの活動であったことと、唱和自体は歴史に記録するほどのものではないという考えから、伝記の中にも記されないことが多い。

このことを全祖望が意識するきっかけになったのは、厲鶚の『宋詩紀事』の編纂作業への参加であると考えられる。厲鶚は、詩社の記録をとりあげようと、当時翰林院にいた全祖望に伝記資料を求めたのである。一時的に流行した詩社の活動は、ほとんど歴史に記録されることがなく、資料収集に両者は苦勞することになる。また、唱和において領袖と称された厲鶚でさえ、地方誌、正史など各種史書の伝記には唱和の記述はない。全祖望だけが伝記の中に記録している。このように、唱和の活動が歴史上記録されないことを意識して、歴史家でもある全祖望は自ら『続甬上耆旧詩』を編纂する作業に取りかかるのである。また、自らが参加した揚州、杭州詩社の成員の伝記を書き残すことにも熱心で、当時唱和で名が知られた杭州の周京も、今日では全祖望の伝記によってのみ、生涯と唱和に

おける活躍ぶりを知ることができる。

⑦更に全祖望が杭州詩人たちの活動から影響を受けたものとして「南宋雜事詩」の存在が挙げられる。「南宋雜事詩」は、南宋に関わる事項を、七人の杭州詩人が分けて詠じて百首としたもので、歴史に埋もれた南宋の歴史を詩の形で表現したものであった。同じ意図で試みられたのが、全祖望の『句余土音』であると考えられる。個人の感情の発露ではなく、事実を伝えるための共同の詩作というあり方を、全祖望は杭州から学んだといえる。⑧このように、全祖望は、寧波の人でありながら、祖先が杭州詩社の一員であったことを意識し、生涯にわたって杭州詩壇とともに活動した。寧波での活動も、杭州の影響が大きかったと考えられる。また全祖望は、杭州詩人同様、揚州、杭州の蔵書楼を点々として唱和と書籍の校訂を行う。全祖望の活動は、杭州詩人が他の地域から詩人達を受け入れ、共に行動し、また自らも他の地域に出て、唱和と学術活動を広く行ったことを示す貴重な例である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

①市瀬信子、全祖望と唱和詩－杭州詩壇との関わりを中心に－、福山平成大学紀要、査読無、7巻、2011、pp.21-48

②市瀬信子、『韓江雅集』と杭州詩人、福山平成大学紀要、査読無、6巻、2010、pp.21-42

〔学会発表〕（計2件）

①市瀬信子、揚州『韓江雅集』の詩人達、中国中世文学会平成22年度研究大会、2010年10月23日

②市瀬信子、全祖望と杭州詩人たち、中国中世文学会平成20年度研究大会、2008年10月25日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

市瀬 信子 (ICHINOSE NOBUKO)

福山平成大学・経営学部経営学科・准教授
研究者番号：50176294